

## 平成 25 年度図書館情報学海外研修助成報告書（抜粋版）

知識情報・図書館学類4年  
201111496 後藤 怜

研修期間：平成 25 年 9 月 10 日～平成 25 年 9 月 26 日

目的地：イギリス（ロンドン）、フランス（パリ）、ベルギー（ブリュッセル）、オランダ（アムステルダム、ハーグ）、デンマーク（コペンハーゲン）

研修の目的：

1. 日本と上記の国の利用者と利用状況を比較すること。
2. 図書館が利用者に対しどのようなサービスを提供しているか、実際にそのサービスを受けたうえで考察するということ。
3. 図書館構造は日本のものとは異なるのか。実際にその場を経験することで使い心地というものについて考えること。

研修報告：

私は助成金でイギリス、フランス、オランダ、ベルギー、デンマークの五か国で国立図書館や市立図書館など大小さまざまな図書館を見学しました。

上記の国を選択した理由は、大学の授業においてユーロ圏の図書館は先進的であるという話を聞き個人的に資料を収集するうちに実地調査を行うことが必要だと考えたためです。

日本の図書館における問題として、利用者の目的が本を読むだけではないにもかかわらず、読書以外が目的である利用者への対応が図書館として場当たりのものであるということがあります。ここから言える問題として、利用者と図書館を作る際のコンセプトデザインに決定的な違いがあるということです。

私が、この問題にうまく対応していると感じたのは英国図書館です。（図表 1）同図書館は「Reader`s card」という入館カードを個別に発行しています。カードの発効に必要なものは住所を確認できるものだけです。ただし、英国内の住所に限ります。そして、このカードがなければ図書室には入室することすらできません。しかし、図書カードを持っていない人も館内のカフェやレストラン、博物館、クロックなどは使用できます。図書室だけが利用できないのです。つまり、来館者を目的によって空間で分けているのです。このような対応は、オランダを除く四か国すべての大小さまざまな図書館で似たような対策が取られていました。



（図表 1）英国図書館



（図表 2）  
スパイゼニック市立図書館

オランダでは、完全に日本のようなオープンスペースとしての図書館でした。しかし、図書館建築が日本とは異なるように感じました。それは、図書館として独立した施設ではなくカフェや講演会場など利用者の目的に合わせたスペースが設けられていることです。

私が見学したのはアムステルダム公共図書館、アムステルダム市立図書館、オランダ王立図書館、スパイセニッケ市立図書館です。これらにおいて、空間は図書館自体の大小に関わらず利用者が思い思いに過ごせるよう工夫されていました。特にこの考え方が見て取れたのはスパイセニッケ市立図書館です。(図表2) 建物自体がピラミッド状になっており、スペースの有効活用のアイデアが詰まっていました。



(図表3) フランス国立図書館特別展示室



(図表4) デンマーク国立図書館

また、図書館そのものに対する考え方が日本と大きく異なると感じたのはデンマークとベルギーです。デンマークで訪れたデンマーク国立図書館は街のシンボルのようになっていました。館内にはミシュランで星をとった高級レストランがあり、オランダ以上に複合施設として利用されていました。利用者たちも思い思いの時間を過ごしていました。また、デンマークで訪れた国立図書館内ではパーティーが開催されていました。(図表4.5)

利用者の意識の高さが感じられたのはフランスです。学習目的の利用者が大半を占めており、そのためのレファレンスサービスの発達は素晴らしいものでした。レファレンス専門の司書数も多く、学習の手助けのために多言語で利用できるホームページや図書館専用のスマホアプリもありました。(図表3)

最後に今回の研修旅行を通して強く感じたことは、日本の図書館は保守的ではないかということです。図書館を、読書以外の目的で使う人を許容することを前提において上で、どのように利用者を分けるのかということを考えるべきではないでしょうか。

そのためにはどのような図書館創造が必要なのか今後、私自身の研究課題として考えていきたいと思います。



(図表5) 筆者とデンマーク王立図書館